

東蘭組

「伊勢音頭」の歌詞

ここに示す歌詞は、調査の際に「得意な歌」「グループ独自の歌」「雰囲気を考えて歌う歌」などと依頼して、歌われた歌の歌詞である。

『伊勢音頭調査報告書』の中の「御坊祭の〈伊勢音頭〉」（以下、「報告書本文」）では、歌われた歌詞の「歌い出し」を記すことで表7にまとめ、歌詞の概観を行った。表7では、歌のふしの種類によって、「短い歌」「長い歌（紀小竹組にのみ「ながうた」という独自の呼び名がある）」「つなぎ歌（引き継ぎ歌、受け取り歌）」をまとめて示したが、ここでは、収録の際の歌われた順に示している。（歌のふしの種類については、「報告書本文Ⅱの表3」参照）。

なお、表記は、歌詞は黒字で、囃しことばは、音頭取りを赤字で、乗り子を青字で行っている。

歌詞のみ（囃し無）

◎歌い手（昭和36年生）

長い歌：紀州名物 御坊の祭り 鶴は鶴でも数あれど 東蘭組親子鶴 奴姿の若い衆は
昔懐かし飛び鶴で 今じゃ伝統舞鶴で 一に喧嘩で二に喧嘩 三四がなくても
五に喧嘩 幟差し（のぼりさし）の若い衆は 力自慢の見せ所 伝統受け継ぐ獅子舞も
きれいに見事に舞を舞う 見事といえば伊勢音頭 御坊祭の伊勢音頭
目出たい祭りをできるのも 一人一人の頑張りで 力合わせた証（あかし）なり
祭りに見えてる皆様も お家（うち）におられる皆様も 必ず一度はご覧あれ
粋な若い衆をご覧あれ これぞ蘭組の 秋祭り

長い歌：お酒飲む人は しんから可愛い（かわい） 奴姿の若い衆よ ほろ酔い機嫌の
思い出は 過ぎしにしえ走馬燈 幾百年の秋祭り 時の区長や元老と 血気
にはやる青年が 艱難辛苦の甲斐ありて 年も大正六年に 小竹八幡お社に
晴れて氏子と認められ 競う差し手も鶴印 万両にまさる喜びよ 生涯わする
な若い衆よ 共に祝えよ 秋祭り

◎歌い手（昭和62年生）

長い歌：日高名所 数々あれど 西に灯台日の岬 中に流れる日高川 奥は緑の椿（つば）山で
湯の香も煙る龍神で 三十木（みそぎ）矢之助溪谷寺 天狗の立った興国寺
安珍清姫色絵巻 悲恋に残る道成寺 続く松原煙樹浜 日高広野に
悠然と あまた数あるその中で 御坊祭は 小竹八幡よ

長い歌：一人娘を 嫁にとやるにゃ 箆笥長持はさみ箱 あれこれ揃えてやる程に 二
度と戻るな出て来るな そこで娘のいうことにゃ 父さん母さんそりゃ無理よ
西が曇れば雨とやら 東が曇れば風とやら 千石積んだる船でさえ 港を出る
ときやまともでも 風の吹きよで出て戻る まして私（わたし）は嫁じゃもの
ご縁なければ 出て戻る

◎歌い手（昭和 39 年生）

長い歌：秋の夜長も 九千年も 北の大雪（だいせつ）くぐり抜け 中国ロシア朝鮮と
季節めぐって渡り来る 美鳥（びちょう）数あるこの世には 羽ばたく一羽のそ
の中に 広大釧路に丹頂（たんちょ）鶴 南国ロシアに鍋鶴か 朝鮮半島（はん
と）に真鶴（まなづる）で ソデグロカナダに黒もあり 昔懐かしや飛び鶴で 今
じゃ惜しまれ舞鶴か 黄金（こがね）花咲くその頃に 西の夜空は花見月 東の
夜空にや鶴が舞う 光輝け 羽ばたけよ

長い歌：お国自慢を 甚句に読めば 北は北海盆踊り 八戸小唄で夜が明ける 今も昔
も変わらない 草木のなびく佐渡おけさ どじょうすくい安来節 三井三池
の炭坑（たんこ）節 花笠音頭で花が咲く 博多祇園か黒田節 日向かぼちやの
よか嫁じよ 稗搦き節には鈴が鳴る ばってん熊本おてもやん お国自慢のそ
の中で 相撲甚句は日本一 わけて名物御坊には 御坊名物 祭り歌

歌詞（囃し有）

◎歌い手（昭和 36 年生）

ヨーイヤッサイ

ヨーイヤッサイ

サーヨーイナーエ紀州名物 ヨイヨイ 御坊の祭りヨ サーヨーイセーコラセ 鶴は
鶴でも数あれど ソーレ 東菌組親子鶴 ソーレ 奴姿の若い衆は ソーレ 昔懐かし
飛び鶴で ソーレ 今じゃ伝統舞鶴で ソーレ 一に喧嘩で二に喧嘩 ソーレ 三四が
なくても五に喧嘩 ソーレ 幟差し（のぼりさし）の若い衆は ソーレ 力自慢の見せ
所 ソーレ 伝統受け継ぐ獅子舞も ソーレ きれいに見事に舞を舞う ソーレ 見事
といえば伊勢音頭 ソーレ 御坊祭の伊勢音頭 ソーレ 目出たい祭りをできるのも
ソーレ 一人一人の頑張りで ソーレ 力合わせた証（あかし）なり ソーレ 祭りに
見えてる皆様も ソーレ お家（うち）におられる皆様も ソーレ 必ず一度はご覧あ
れ ソーレ 粋な若い衆をご覧あれ ソーレ これぞナーエ菌組のヨイトコーレサエ秋
祭りヨ ソラヤートコセ エエヨーイヤナ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤ
ーイートセ

サーヨーイナーエお酒飲む人は ヨイヨイ しんから可愛い（かわい）ヨ サーヨーイ
セーコラセ 奴姿の若い衆よ ソーレ ほろ酔い機嫌の思い出は ソーレ 過ぎしいに
しえ走馬燈 ソーレ 幾百年の秋祭り ソーレ 時の区長や元老と ソーレ 血気には
やる青年が ソーレ 艱難辛苦の甲斐ありて ソーレ 年も大正六年に ソーレ 小竹
八幡お社に ソーレ 晴れて氏子と認められ ソーレ 競う差し手も鶴印 ソーレ 万
両にまさる喜びよ ソーレ 生涯わするな若い衆よ ソーレ 共にナーエ祝えよヨイト
コーレサエ 秋祭りヨ ソラヤートコセ エエヨーイヤナ ハリバンヨーイ コレバ
ンヨイ ソラヤーイートセ

◎歌い手（昭和 62 年生）

サーヨーイナーエ日高名所ヨ ヨイヨイ 数々あれどヨ サーヨーイセーコラセ 西
に灯台日の岬 ソーレ 中に流れる日高川 ソーレ 奥は緑の椿（つば）山で ソーレ
湯の香も煙る龍神で ソーレ 三十木（みそぎ）矢之助溪谷寺 ソーレ 天狗の立った
興国寺 ソーレ 安珍清姫色絵巻 ソーレ 悲恋に残る道成寺 ソーレ 続く松原煙樹
浜 ソーレ 日高広野に悠然と ソーレ あまた数あるその中で ソーレ 御坊ナーエ
祭はヨイトコーリャサエ 小竹八幡ヨ ソラヤートコセ エエヨーイヤナ ハリバン
ヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ一人娘をヨ ヨイヨイ 嫁にとやるにゃヨ サーヨーイセーコラセ
箆笥長持はさみ箱 ソーレ あれこれ揃えてやる程に ソーレ 二度と戻るな出て来る
な ソーレ そこで娘のいうことにゃ ソーレ 父さん母さんそりゃ無理よ ソーレ

西が曇れば雨とやら ソーレ 東が曇れば風とやら ソーレ 千石積んだる船でさえ
ソーレ 港を出るときやまともでも ソーレ 風の吹きよで出て戻る ソーレ まして
私（わたし）は嫁じゃもの ソーレ ご縁ナエなければヨイトコーリャサエ出て戻る
ヨ ソラヤートコセ エエヨーイヤナ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイ
ートセ

◎歌い手（昭和 39 年生）

サーヨーイサーエ秋の夜長もヨ ヨイヨイ 九千年もヨ サーヨーイセーコラセ 北
の大雪（だいせつ）くぐり抜け ソーレ 中国ロシア朝鮮と ソーレ 季節めぐって渡
り来る ソーレ 美鳥（びちょう）数あるこの世には ソーレ 羽ばたく一羽のその中
に ソーレ 広大釧路に丹頂（たんちょ）鶴 ソーレ 南国ロシアに鍋鶴か ソーレ 朝
鮮半島（はんと）に真鶴（まなづる）で ソーレ ソデグロカナダに黒もあり ソーレ
昔懐かしや飛び鶴で ソーレ 今じゃ惜しまれ舞鶴か ソーレ 黄金（こがね）花咲く
その頃に ソーレ 西の夜空は花見月 ソーレ 東の夜空にや鶴が舞う ソーレ 光ナ
エ輝けヨイトコーレサエ 羽ばたけよ ソラヤートコセ エエヨーイヤナ ハリバ
ンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイサーエお国自慢を ヨイヨイ 甚句に読めばヨ サーヨーイセーコラセ
北は北海盆踊り ソーレ 八戸小唄で夜が明ける ソーレ 今も昔も変わらない ソー
レ 草木のなびく佐渡おけさ ソーレ どじょうすくい安来節 ソーレ 三井三池の
炭坑（たんこ）節 ソーレ 花笠音頭で花が咲く ソーレ 博多祇園か黒田節 ソーレ
日向かぼちのよか嫁じょ ソーレ 稗搦き節には鈴が鳴る ソーレ ばってん熊本お
てもやん ソーレ お国自慢のその中で ソーレ 相撲甚句は日本一 ソーレ わけて
名物御坊には ソーレ 御坊ナエ名物ヨイトコーレサエ 祭り歌ヨ ソラヤートコセ
エエヨーイヤナ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ